

---

# IS 『に』 転生ってふざけんな！

出川 戦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS『に』転生ってふざけんな！

### 【Nコード】

N4278Z

### 【作者名】

出川 戦

### 【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく断である。

## 第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・？

## 第1話

気付くと、俺は真つ暗な空間にただ1人いた。

(なんだ……ここは……？夢の世界ってヤツか？)

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。　　ってちよつと待て！

(なんだよ処刑場って！　ていうかあんた誰だ！？　あれ？声が出ない……)

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

(ああ、なんだそういう事か……って納得できるか!!)

「五月蠅いですよ」

神様(自称)は冷たい声でそう言った。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によつて減つていきます」

(あ、ひよつとしてそつちの手違いでまだ死なない俺を殺しちやつたからどっかの世界に転生させてくれるとか……って俺死ん

だの!?)

「そうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違いなんてしません。なんせ全知全能ですからミスなんてあるはず無いのです」

(おおつふ・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの?)

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね?」

(・・・)

「さらにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかったり、アンティールルで決闘デュエルしたりしましたね」

(・・・はい・・・)

「さらにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをし続けていましたね」

(ちょっと待ってくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積もりに積もった小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぽっくり逝く事になってしまいましたね(笑)」

(笑)じゃねえ!!何が悲しくて17で死ななきゃならなかったんだよチクシヨウ!)

「あ、一応言っておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬことになってました」

(なお酷いわ!! ……っ、おい。それはどういう事だ?)

「あなたは非常識なほど悪運が強かったので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になったのです」

(……俺って、何度も死神に迎えにいられてたんだ……)

「つたく、役立たずが……。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこか適当な世界に転生させます」

(今、神様が真っ黒になった気が……。っーかこれ、棚ボタなんじゃないか?)

「あなたが思っているほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

(ならISの世界で!ちゃんとIS動かせるようにしてくれよ!)

「誰が貴様のようなゴミ虫の言う事なんか聞くか」

(……あれ?なんかキャラ変わってない?)

「ごたごた五月蠅い! ISですね! それでは逝ってらっしゃい」

(字違う!! ……あれ……なんだか意識が遠のいていく)

(……あれ？ ここはどこだ？)  
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

(あ、まさか俺、ここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、ここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺)

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISスーツだろう。

(……ってちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろうか!!！)  
その時、俺は気付いた。『俺、さつきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は……3巻末と6巻の初めに出てきたナターシャさんじゃないか！

まさか……まさかとは思うが……俺、ちゃんと人間  
に転生してますよね、神様ア！！

「これからよろしくね、シルバリオ・ユスベル『銀の福音』」

やっぱりかああああい！！！！

## 第1話（後書き）

ウザい主人公ですいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかったのも、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの？」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願いします。

## 第2話(前書き)

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆるワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させてい  
ただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば  
界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公の生前犯した罪について、まだ書いてな  
かった細かいところも説明してさしあげましょう」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていた  
りモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやってるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子  
を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の  
弁当を持って来ていた始末だ」

「そりゃすごい」

神「あとは・・・昼休みに決闘<sup>デュエル</sup>していた」

「私もやってますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らな  
い大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのじ  
ゃ2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されなくなかつた  
ら財布を置いてさっさと消えな』と言い放つたり」

「それはひどい・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・あまり長くするのもなんだ。これ

「うん、おれは」  
「そだね。では本編をどうぞ」

## 第2話

(これ、終わったんじゃない?)

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うと口もきけない。なにこのプレイ。誰得?

「これからよろしくね、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』」  
俺得でしたw。

(キタだろコレ!)

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの?」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずっと考えて6巻で再登場した時にテンション上がった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとすっげー美人。

まあとどのつまり、何が言いたいのかということ・・・今、彼女はISスーツを身につけている。という事は、今からISに乗ったりするわけだ。

そのISが何かって? 決まっているだろうこの俺、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』だ!

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくっつくわけで・・・  
・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。ついでに血も通ってないわ。

(いや、そんなブルツクみたいなのを一人でやってんじゃねえよ！)

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」  
研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「いえ。何でもないわ」と答えた。

・・・・・・・・つーか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかってるぞ、俺。やっぱりISになったから頭の方も良くなってるのかもしれない。

「(気のせいかしら・・・・・・・・。いつもとISの反応が違うような気が・・・・・・・・)」

初期化と最適化が終って気付いたのだが……ISの装甲には、俺の感覚というものが通っていなかった……。

どういう事かというところ、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するということに対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触っていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実には違った。

ISの装甲部分に感覚が無いという事は、触っている感触もクソも無いのだ。ただ意識だけがISの中にある。今の俺はそういう状態なのだ。

(期待した俺が……馬鹿だった)  
心底俺はそう思った。

「ファイルス、調子はどうか？」  
オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん……なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような……」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「まだ一次移行もできてないし……チーフ、一度コアをリセットするべきではないでしょうか」  
ファースト・シフト

（……は！？ ちよつと待ってくれ！ もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ！？ このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか！？ あ、冥土の土産に丁度いいかも……ってそうじゃない！ せつかくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ！ 臨海学校編ですよ！）

ISには、意識と似たような物がある……そう言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりがねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならなければならぬんだ！

（がんばれ俺！ やればできる！ どう頑張ればいいのかわかんねエけど！）

とりあえず一次移行が終了するようにと俺をこんなのにした誰かさんに祈りを捧げると……

『フォーマット 初期化と最適化フィッティングが終了しました。確認ボタンを押して下さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解った。

「っえ！ さっきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに……!?!?」

そんなバカな。あれからけっこう時間経ってたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊れてるんじゃないか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう」

ナターシャさんは研究員に向かってそう言った。

(ん？テストって……?)

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの楕円形のスペースが姿を現した。

(これは……ISのバトルフィールドか……?)

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているその中に、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今で解ったが……どうやら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在って無いようなモノ、か……。なんだか悲しいな。

(まあでも、間近でISの戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるってか)

俺はISはアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。

その理由は、アニメで観たISの戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが……。

キャラも可愛かったから好きだが……やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんないい話はそう落ちてないねきっと。

……はい。強がりです。自分も専用機持つてこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうありますが。まだ二次移行してないから機械つぽい多方向推進装置マルチスラスターですけど。

とかなんとか考えてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS           アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴァイブか           が現れた。

（まさか、いきなり実践っていうヤツじゃ……ないわけないか）  
思えば一夏もそうだった。いきなり代表候補生のセシリアとタイムンで闘うという無謀な挑戦だった。

だが俺は一夏の二歩三歩先に行く！ なんて言っただって、こっちは専門的知識すら単語一つも理解してないどころか見てすらいないんだからな！

（とか何とか言っても、ただ見てるだけなんですけどね）

向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思っていた時だった。

リヴァイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わって来た。これは撃たれるな。

だがこっちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに  
違い

バカアアアンツ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。  
実体ダメージ、レベル中。

（痛てエ！！？ なんだコレ！？ 感覚ないクセに痛覚だけあんの  
かよ！！！）  
俺は脚部に感じた痛みには戸惑いながら、なぜナターシャさんが避け  
なかったのかを即座に考えていた。これもISになったお陰なのか  
？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が……『俺の動く意志に比  
例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなったり伝わ  
りにくくなったりする』というのが真っ先に浮かんだ。

（ちょっと待ってくれ！ 俺は戦闘訓練なんて全くやって無い、ズ  
ブの素人なんですけど!?!?）

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパーセンサーで全方位が  
視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な  
動きを見せてるんですけど……。

（まさか、コアのリセットか福音オレの廃棄処分についての判断じゃな  
いだろうな……!!?!?）

## 第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは……」

「そういえば、彼がなにかあなたに祈ってましたけど、何かしたんですか？」

神「特に何も。やろうと思えば何でもできるけど」

「……それにしても、このままだとホントに次で連載終了すんじゃないか？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯だって何度も死にかけてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃないか」

「身も蓋もない事言うなよ。盛り上がらないだろ」

神「そういう発言は控えるよ」

続く

### 第3話（前書き）

「今日は寒かった」

神「唐突だな」

「関係無いけど、部屋でストーブ点けてさあ執筆だ、と思ったらマウスの電池が切れてたり」

神「ふむふむ」

「かと思つたら、実はマウスの電源がオフになってただけだった」

神「残念なヤツだな」

「まあ雑談はこれくらいにして本編始めますか」

神「本当に終わつたら面白いんだけど」

### 第3話

(考える！　なんとかしてこの圧倒的なまでの危機的状況を打破するんだッ！！)

このまま死ぬのはまっぴらご免だ。だつてせっかくナターシャさんと会えたんだもん。このまま近くにいたら風呂場とかまで一緒に持つて行つてくれ・・・じゃない。ISの戦闘を直で感じられないじゃないか！！

(やっつてやる！　やるしかないんだ！！)

「(どっぴいっ事なの・・・！？　福音が私の動きに全くついていない！)」

私は、今までとのISとは全く違う福音に戸惑っていた。

そもそも、この『銀の福音』シルバリオ・ユスベルは国際条約違反の軍用IS。前まで操縦していた量産型や競技用のISとは少し勝手が違うとは思っていたけど……ここまで違うものなのとは思っていなかった。

ハイパーセンサーによる視覚補正で、研究所の職員が信じられないという顔で私を、福音を見つめていた。やっぱり、あの人達にも想定外の事なのね。

「（ここは一度引き上げて、検査してからもう一回テストするのが賢明ね……）」  
私がテストを中断しようと、通信回線を開こうとした時  
微かに、声のようなものが耳に入った。

いえ、そうじゃない。耳で聞いたんじゃない、もっとこう……『感じた』とでも表現するべきな感覚。

「（まさか……でも、他に考えられない）」

ISには意識と似たようなものがあり、IS側が操縦者の特性を理解する事でその性能をより引き出させてくれるというのは有名な話だけど……これほど顕著に表れるモノなのかしら？

でもさっきの声のような……福音(この子)の叫びは、きくと闘いたいと言っていたわ。正確には解らないけど。

「一緒に、飛びましょう」

シルバリオ・ユスツル  
銀の福音!」

(………?)

なにか聞こえた気がした。それも音じゃなくて……なにか、こっ心に直接響いてきたというか、テレパシーみたいなのが。テレパシ-なんてしたこともされたこともないから、わかんねエけど。

(とにかく、今はあのリヴァイブをどうにかしなきゃな)



バトルフィールドの壁とかはエネルギーバリアーで防御されているので、壁が壊れたりすることは無いのだが、それでもその中にいたリヴァイブは銀の鐘をモロに食らったらしく、大ダメージを受けていた。

(いや強すぎだろ『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘル!!!)

アニメではラスボスの扱いで、原作では第4世代型2機に墜とされたが……ここまでとは思わなかったぞ、軍用IS。

なんかさっき、近接戦に持ち込むと感じたんだが……俺、素人だつて言ったじゃん！でもここで動かなかつたらまた体勢を立てなおされて撃たれるだろうなあ……。痛かつたんだよな、撃たれたりすると。



圧倒的なまでの数のエネルギー弾が、フィールドの中全てを焼き尽くした。  
そしてもちろん、その的となった相手のリヴァイブには相当のダメージを与えた。

「（流石は軍用・・・出力がケタ違いね）」

でも油断は禁物。相手もアメリカの優秀な操縦者が搭乗しているわ。現にあれだけの火力の差を見せつけられても、まだ闘いを諦めてはいない。すぐに体勢を立て直し始めている。

この子の性能は、<sup>スペック</sup>攻撃力だけじゃなく機動力も高かったハズ。今は出力を抑えて通常戦闘仕様にしてあるけど、本来は超高速で動けるほどのスピードがある・・・。

「（ここは近接戦で一気に攻めて、勝負を着けるべきね！）」

ギューーーーーッ!!

「うそっ!?!」

私は今起きた現象に、驚く事しかできなかった。

私はただ『一気に近付こう』と思っただけなのに……この子は勝手に、イグニッション・ブースト瞬時加速と間違えるほどの急加速で相手に近付いた。

まだ接近すると命令していないのに、私の判断を上回る速さでこの子は動いた。

「(本当、どこまでも変わった子ね)」

うおおおお。やべえ、今のはヤバかった。

ナターシャさんが近接戦をしようとしたような気がしたから、急加速で近付こうとしたのに……。その急加速が半端ねエ！危うく墜落するところだった。一夏みたいに。

寸前のところで急停止が間に合ったから良いものの、二度とこんな肝を冷やすような事はしたくないね。

（そついや、俺って福音ふくゆいがどれだけの性能を持っているのか知らないんだよな。まあ、表とか見せてもらっても解るとは思えないけど）

え？　なんでだらだらそんなに喋っていられるのかって？

それは、もう戦闘テストが終っちゃったからなんだよな……。

接近中に近接武器がないかと探してただけど・・・オレ福音、武器が翼しかなかったんだよ。刀1本の一夏の気持ちがよく分かるぜ・・・。

だからそこからまたエネルギー弾を乱射して、そのままゴリ押しして戦闘終了。ああ、高火力って素晴らしい。

そういえば、ナターシャさんは俺が突っ込んだ時に（リヴァイブに急加速したこと。べ、別に他の意味なんてないんだからねっ！）ビツクリしてたから、俺の意志が優先される場合もあるって事か・・・。  
まだまだ解らないことだらけだな、この状態。

とにかく今日はお終いみたいだし、今後の俺の行方はまさに神のみぞ知るってことだ。

あの神様だけが、な。

### 第3話（後書き）

神「終わらなかつたね」

「当たり前ですよ。3話で終了ってちょっとした記録ですよソレ」

神「つち。つまんねえの」

「それはそうと、知ってるんですか？この先」

神「そりゃあ神だし」

「ですよー」

神「つーかさ、福音に近接武器無いつてホントなの？」

「知らない事あるじゃん。福音戦では一回も、そういう描写は無かつたんですよ。だから持たせようかとも考えたんですが……やめておきました」

神「コレは今後に大きく影響を与えますね。先は考えてあるの？」

「あと2、3話分は。それから先は……どうしようか？」

神「終りで良くね？」

「せめて10話はやろうよ」

続く

## 第4話（前書き）

神「なにか言いたい事があるんじゃないのか？」

「この小説書くのがなんだか楽しくなってきたんだけど」

神「あ、そ。でもほどほどにしておけよ？蓮舫の時みたいにクレーム来たら一瞬で消えちまうんだから」

「ですよー。日本の表現の自由はいろいろ制限が付きますから神「それは制限ではなく、プライバシーや名誉に関わる事に関しての当たり前の苦情だがな」

「でも蓮舫のはいいだろ別にと思っ」

神「アレは相手がイメージばかりを追求する国会議員だからああなっただ。実際ジブリは113話見て大爆笑してたっけ言うし、面白ければ大概の事は流せられる。ただし今回は相手が悪かっただけ冗談が通じない国会議員相手では結果は目に見えている」

「あれ？なんだか神様キャラ変わってない？」

注） 今回の神様の説明には、一部フィクションが含まれている可能性があります。第3者の情報に惑わされるのではなく、自分でしっかりと調べてから意見を出し合しましょう。1人1人のネットマナーが、多くの人を救えたらいいのにねw

「誰だよコレ……。まあいいや、本編どうぞ」

## 第4話

転生してから何時間経ったことやら……。

俺は今、ナターシャさんと一緒に（ここ重要！ テストに出るよ！）風呂に入っている。

「なんて羨ましいんだ！ 俺と代われッ！」 「チェーンジッッッ！  
！」とお叫びになられている方も大勢いらっしやると思います。

え？ 前話までと口調が違っつて？

ちょっとした賢者になっている今の私には、今の喋りの方がしっくりくるのですよハッハッハ。

でもですね、羨ましいというのは浅はかってモンですよ。

(だって、見えないどころか聞こえすらしないんだもの……)

せめて、音だけでも拾ってほしかったッ！ できれば感覚もあってほしかったッ！！

だが現実には悲しいかな。カメラがオフになっているので視界はゼロ。全くの黒。さらに耳が無いから音聞こえないの、テヘッ。

そんななどこの高僧が喜ぶのかわからねえくらい禁欲世界なのだよ、ここは……。

(お願いだ、3分間でいい。誰かこの俺を解放してくれ!!!)

誰も解放してくれませんでしたw 神後でおぼえてる！

(っーか・・・待機状態ってマジで何もする事ねえな・・・。せめてナターシャさんと会話でもできたらなあ)

などと考えながら、俺は何もせず、無為に時間を浪費していた。え？ 一人称が戻ってる？

賢者モードから解放されたんだよ。

で、風呂から出た後俺は眠かったから寝させてもらった。

この状態でも寝るといふ感覚はある。さらに眠気も感じる。不便で仕方が無いと思えるだろうが、これは実際ありがたい。

人間って生物は、寝てないとストレスがたまる。そのストレスの発散先を自分で用意できない今の俺には、眠るといふ事ができるのは嬉しい限りだ。存分に寝かせてもらおう。

目が覚めると、そこはよく分からん場所だった。

「……教会……?」

目の前には見上げるほど大きなパイプオルガンが壁のようにそびえ立ち、横に長いイスが規則的にいくつも並んでいる。

その光景は、まさしく万人が思い描く『教会』だった。キリスト式の。

ってか、俺今喋らなかつたか!?

「あ……あー。本日は晴天なり。じゅげむじゅげむごころのすりきれビッグバンアタック!我が生涯にいつへの悔いな……よっしやあああ!……!」

やっと・・・やっと言葉が話せた！！ おまけに身体もある！ なんて知らんけど甲冑着けてるけど。外せないけど。

「う・・・うーん？」

俺が浮かれ上がっているすぐ近くで、どこかで聞いたことのある声が聞こえた。

(ま、まさか・・・)

「・・・え？ ココは、どこ・・・?」

ナターシャさん来たアアアアアアア！！！！！！

(マジか！？ マジなのかコレ！！ 俺の深層意識が創り出した仮

想空間（夢）じゃないよね！！ 現実だよね！！？）

コレが現実なら・・・今、俺はナターシャさんと2人ツきり！  
おまけにここ教会だし！もう死んでもイイ！ あ、もう1回死んで  
たんだっけ。でも2回死んでもイイよ、グリーンだよ俺！！

「  
ッ！」

刹那、俺の視界は反転し、背中と後頭部を強打する。やっぱり痛み  
はあるな。あと抑えつけられているは甲冑のせいで無いけど、身体  
が動かないからきつと抑えつけられているってわかる。

（っーか、さっき何があった!?!）

俺が痛みに顔を顰めながら状況を確認する。だが視界が狭く、俺に  
何かした犯人を一瞬で見る事はできなかつた。

「あなたは誰!? 私をこんな所に連れて、一体どうしようとして  
いたの!?!?」

「いや犯人アンタかよ!!!」  
声で解った。犯人はナターシャさんだと。

予想外すぎる衝撃的事実に、俺は反射的に起き上がる。その時の力が凄まじかったのか、俺を抑えていたナターシャさんは吹っ飛ばされてしまった。

てかさつき、どういう体位だったんだろう。ひょっとしてすごくエロかったりして……。

(いや、そんなこと考えてるヒマないぞ今！ ナターシャさん俺の事すっげー睨んでるもん。敵意丸出したもん)

とにかく、俺の事をわかってもらわないと話が進まねえな……。  
何を言ったらいいものか……。

とりあえず、俺が福音だっということから信じてもらおうしかないか。

「あー、ええっと……俺はアンタの持ってる『銀の福音』だ」  
シルバリオ・ゴスベル

オイ俺！ もうちょっと言い方他に無かったのか！？ なんかいろいろおかしかったぞ!!

ほら、ナターシャさんも全然信じてくれてな「まさか・・・そんな！」意外とイけそうだ！

「いやホントだつて。教科書とかにも書いてなかった？ 『ISには意識と似たようなものがある』つて。その意識が俺」

「・・・たしかに、それはISに関わる人間なら誰でも知っているわ。でも、あなたがあの子だという証拠が無い」  
あの子・・・あ、福音<sup>オレ</sup>か。

「うーん・・・こんな恰好してうるついでいられると思う？」

やっちまったああああ！！ コレ完全にドボンだよ！  
確かに理に適ってるけどコレは無いだろ！ いくら思いつかなかつたつてコレは酷過ぎるだろおおお！！

「そ、そうね・・・あなたの言う通りだわ」  
ほら、ナターシャさんちよつと引いてるよ！ 多分兜みたいな物付けてるからわかんないと思うけど、俺もう涙目だよ！！

「んで たぶん、ここは俺の・・・福音の深層意識みたいな空間だ・・・と思う」

「ちよつと待って！ 思うつてどういう事！？」

「俺だつてさつきまで何も無い真っ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉

しくて混乱してるんだよ!！」

……ってまた恥ずかしい事をおおお!!！」

確かに寝ていたはずの私と同じ空間にいた甲冑の男はこう言った。

「たぶん、ここは俺の……福音の深層意識みたいな空間だ……と思う」  
彼は確かに『思う』と言った。ここは彼……あの子(福音)の空間じゃないの？

「ちよつと待って！ 思うってどういう事!？」  
私は彼に訊いた。ここでもし的外れな解答や返答に悩むようなら、  
すぐにでも殺さなければならぬ。

相手は男。ISは使えない。いざとなれば私の持っているこの鐘・・・  
銀の福音シルバリオ・ゴスベルでこの教会ごと吹き飛ばしてしまえば・・・。

「俺だつてさつきまで何も無い真つ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉しくて混乱してるんだよ！！」

彼は確かに言った。私の事を『操縦者』と。

彼は自分の事を福音だと言っていた。そしてその操縦者が私だと言いつつ当たった。

この子・・・銀の福音は、その全ての情報が国家レベルでの機密とされている。

だから外部の人間が、その事を知っている筈はない。

あの子を開発した研究員なら誰でも知っている。でもそれ以外は・・・  
・大統領ですら、私が操縦者だとは知らない。だから外部の人間が知り得る事なんて有り得ない。

さらに、開発チームは選り抜かれた少人数で構成された。だから顔も声も私はよく知っている。  
でも、あんな声を持つ人はいなかった。

「(だとしたら・・・彼は本当にあの子なの・・・?)」  
でも、ISの深層意識と対話するには長い年月をかけてお互いを理解し合わないといけない。  
なのに、たった数時間搭乗しただけの私の目の前に現れるのが解らなかった。

「(いえ。ISにはまだ私たちには解らない事が多い。こういう現象があってもおかしくは無いハズ・・・それに)」

それに彼は・・・『1人ぼっちだった』と言っていた。

何もない空間で、ただ一人、寂しい思いをして過ごしていたんだと思う。

それに、私に会えて嬉しかったとも言ってくれた。

「(なんだかんだ言っても・・・まだ生まれたばかりの子供なのかもね)」

だったら私が、育ての親になってあげてもいいわよね。

#### 第4話（後書き）

神「まさかの に入りましたね」

「ホントですねー。どうしてこうなったし」

神「あなたが話引き伸ばすために作ったんでしょ？」

「でもここまでとは……。暴走したとしか言いようが無い」

神「それで、これからどういう風に進めて行く気ですか？」

「あと1話か2話こんなカンジの話をして、原作3巻に侵入しようかと考えてます。」

それより、ホントキャラが安定しないよね、きみ」

神「これが本来の私です。でも、それでは10話まで持たないんじゃないですか？」

「一応6巻でも名前だけ出てきてるから……。あ、でも凍結処理されてるから動けないのか。本格的に継続が危ないことに気付いた」

神「また終る終わる詐欺か。いい加減にしたらどうだ」

「イイじゃん別に」

## 第5話（前書き）

「この前書き後書きの座談会が不評な件について」  
神「知らん」

## 第5話

待機中で使える機能と、使えない機能がある事が徐々にではあるがわかってきた。

まず、外部との接触が全くと言っていいほどできない。音も聞こえなければ周囲を見る事もできない。

あと、この甲冑を強引に引き剥がそうとしたらものすごい痛かった。やっぱりコレ俺の一部だった。痛覚だけある。

それで、中身が多分だけ無い事が分かった。わかりやすく言うならばアルフォンスのような状態だ。

あと、急にここに来たのってなにか理由があるんじゃないかとヒマだったので考えた結果、俺の意識が完全に福音の意識？ を蝕んだという結論に達した。

これもし福音（の意識）が蘇ったりしちゃうたら、どうなっちゃうんだろうね。まさかその為の甲冑とか？ どうせなら剣も付けてくれよ。

（それにしてもヒマだな。なにか起こんねえかな・・・）

ポーッと真つ暗な、あるのかどうかも分からない天井を見上げてた時だった。

一瞬にして視界が変わり、目の前には虎模様のISタイガー・ストライプが浮いている。

(・・・どういう状況?)

私は、変な夢を見た。

ベッドで寝たと思ったら、銀色の甲冑を着た男が騒いでいたので起こされ、起きた場所はどこか知らない大きな教会で、その甲冑の

男の話によると自分は銀の福音で、その教会は自分の深層意識がど  
うのどうのと言いつらさず、常識で考えたらいろいろとおかしな夢。

そして目が覚める直前に、あの甲冑の男は「あんたと会えて嬉しか  
った」と言っていた……。

という話を、同僚のイーリに相談したら……

「なにそれ気持ち悪っ!!」  
即答だった。

「ちょ……ナタル、それきつとストーカーだぞ」

「なんで夢の中にストーカーが現れるのよ……」

「アレだよ、アレ。寝てるナタルの耳元で、そのストーカーがそっ  
と呟くんだよ。で、ナタルは夢でその言葉を」

「それ以上は言わないで！ 蕁麻疹が出る……っ」

私は背筋に寒気がしたが、反射的に耳元を手で隠すようにしていた。

軍の宿舎で寝泊まりしているからと言って、油断はできない。その  
警備がやってくるかもしれないという、自分でもわかるくらい自意  
識過剰な疑心暗鬼に陥ってしまった。この目の前のイーリ（バカ）  
のせいだ。

でも・・・あれは、ただの夢じゃなかった気もしないでもない。そんなあやふやでもやもやした気持ちで、私の心の奥底で燻っている。

「（なにか・・・大事な事を忘れているような・・・）」

あと・・・まるで、誰かが私のすぐ近くにずっといるような気が・・・。

「（ やっぱり、ストーカーかしら・・・？）」

本格的にそっちの線が濃くなってきたので、私はストーカー撃退用の罠を設置しようと考えた時だった。

「おい、ナタル。そいつの実戦テスト、そろそろ始めるんじゃないのか？」

「そっといえばそうね。もう行かなくちゃ」

今日は福音（この子）の実戦でのデータを收拾するためのテストがあるのを、あの夢のせいですっかり忘れていた。

そして数十分後。

私とこの子（福音）は、昨日一緒に闘ったバトルフィールドに  
来ている。

「ファイルスさん、準備を始めて下さい」

「了解しました」

研究員の指示に従い、私は銀の福音を身に纏う。

そして私と対峙しているのは……さっきまで私と話していた、  
イーリ。

彼女のIS、『ファング・クエイク』は安定性と稼働効率を重点的  
に昇華させたバランス型のIS。

「（つまりそれは、長期戦に持ち込まれたら不利ということ）」

さらに今回は、ファング・クエイクのデータも取るために全力で勝

負しろと上からお達しが来ている。できればこの子に勝たせてあげたいのと、イーリに負けたくないという私情も入ってくる。

でも……前回の起動テストみたいに動けなかったら、イーリ相手ではまず勝ち目が無い。

「(ちゃんと、動いてくれるよね……?)」

もし昨日の夢が、夢じゃなかったのだとしたら……

この子はきつと、動いてくれるはず……!

目の前に駆る虎模様のISを、俺は見た事が無かった。

(でも、あの虎模様になにか引つ掛かるんだよね)

詳しいデータが欲しいと俺が思ったとき、視界に詳細な情報がぼこぼこ浮かび上がった。

(なにになに……名称、『ファング・クエイク』。操縦者は『イリス・コーリング』か)

あ、たしか6巻で出てきたナターシャさんの親友だったっけ？

ISの方も第3世代で、エネルギー効率重視型か。

(まだ実戦と言える経験をほとんど積んでいない俺に、米の代表さんの相手が務まるのか？ 答はもちろんノーだ)

けどこっちにもナターシャさんがいる。正直俺のヤル気さえあれば、この人が何とかしてくれるよきつと！

……よし、まずは《銀の鐘》シルバー・ベルで一気にシールドエネルギーを削ってアドバンテージを稼ぐか。

『戦闘を開始して下さい』

ビィィィとアラームが鳴り響き、俺は銀の鐘を発動させようとする。

(あとはナターシャさんが起動させるだけ……)

俺がモーションをイメージした瞬間だった。

ガキィインッ!!

突然、車に撥ねられたような衝撃が俺の身体に伝わった。

## 第5話（後書き）

「こんなところでなんだけど、PVアクセス4万&ユニーク数8千越えおめでとう！」

神「普通前書きじゃね？」

「いいんだよべつに。あと、この話を読んで『逃げたな』と思っただ方。この展開は初めから考えていた展開ですので、そこだけは間違わないで下さい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

---

IS『に』転生ってふざけんな！

2011年12月19日02時49分発行